

セッション 10 : 司会の言葉

中 村 治 彦
東京医科大学第一外科

このセッションではマスコミで取り上げられる機会の多いイレッサについて 2 題の発表が行われた。イレッサは周知のとおり、当初、夢の新薬として喧伝された後、間質性肺炎による死亡例の出現により、一変してバッシングの対象となった薬剤である。癌の化学療法を知る者にとって、抗癌剤が抗癌作用に比肩するだけの毒性と副作用を併せ持つのは半ば常識であり、従来の薬剤と作用機序が異なるとはいえ、イレッサも例外たり得ないことは容易に想像できた。今回の騒動について、いくつかの問題点が指摘できるであろうが、マスコミと癌専門医の間に大きな認識のずれがあったことが一番の原因のように思われる。臨床の現場で、抗癌剤が効かず、最後の望みを託したイレッサ投与が奏効し、患者が喜ぶ顔を見ると、この薬剤の有用性を身をもって認識できる。現時点では肺癌治療における数少ない貴重な選択肢のひとつである。重要なのはイレッサによって恩恵を受けた患者と、重篤な副作用がおこった患者を科学的に解析し、両者をいかに区別できるかを冷静に究明することである。2 演題はこれに対する解答として臨床的検討から明らかになった情報を伝えている。専門家委員会の最終報告からは間質性肺炎が起こり易い患者の臨床的プロフィールをうかがい知ることができる。今後は肺癌細胞の遺伝子発現とイレッサ感受性の解析や、多型と代謝・副作用の関係など、分子生物学的側面からの究明を期待したい。